てじっとしていたそうであった。

これは蛇が外気より人間の身体の方が暖かいので寄って来たということである。

二、いざ洪水となると低い所に家のある人は、金持の土地が高くてその上に石垣を高く積み上げた家へ、いち早く大事な物を持って避難したそうであるが、その低い所にある自分の家が流れたりすると悲痛極まりない声であたり構わず号泣した。子供たちも「うちの家が流れる流れる。」といって泣き叫んだそうで、とてもそばでは見ておれなかったと古老は話していた。

三、大きな草屋の藁屋根は、古老にいわせると洪水の時にそのまま浮いてちょうど船になり、転覆もしないようにできているから、家族がそれに乗って流れて居れば助けてもらえることが多いし、また運良く土地の高い所へ流れていって止れば助かるから、吉野川沿岸の人達は藁屋根を重宝して金持でも皆瓦屋根にせず藁屋根にしたそうである。

第六章　民俗・スポーツ

第一節　信　仰

おふなとさん

中央の藤田晃さんの家の前の道路縁にお舟戸さんが祀られている。県下には数多くあるが西麻植地区ではここの一か所だけのようである。お舟戸さんとはどんな神様であろうか。

古事記に「…筑紫の日向の橘の小門の阿波岐原に到りまして禊ぎ祓いたまいき、故投げ棄つる御杖に成れる神の名は衝立船戸神、次に投げ棄つる…」とあり、日本書記には一書に曰くとして「其の杖を投げ給う是を岐神と謂也…岐神此れを云ば布那斗能加微と云…」とある。また一書には「其の杖を投げて曰く此れより以還雷不敢来是れを岐神と謂此の本の号を

おふなとさん

来名戸之祖神という…」とある。

以上のように船戸神、岐神、来名戸神と出てくるが投げ棄つる杖に成れるとは男根の形容で、船戸、舟の形の戸のこととは女性器のことで子供を生み育てる女性の神ということであろうか。

また岐神とは岐は人間の股とか、ふたまた、山の分れ道のことで、股から陰部を意味するので性神として祀り増殖の神としてあがめ、山の分れ道の意から道祖神となり、また発音のクナドからクナは来るな、ドは処で他から悪疫や害虫が入って来ないようにと防塞、防障の意にもなり結局は道祖神として部落の境とか畑等に祀られるようになったのであろう。ここのおふなとさんは昔は焼き物の社があったが、何時の頃からか無くなって今は台石が残っているのみである。その石に穴があいたりしているが、子供の頃、今の子供とちがっていろいろな遊び道具が無かったのでこの上へあがって跳んだりはねたり穴をあけたり、いたずらをして一日を過ごしたもので、穴はその子供達のいたずらの名残である。

地神さん

忠魂碑の東側、国道一九二号線南沿いの西麻植市の河野光太郎さんの農地の中と八幡神社の拝殿の南側の三か所にある。五角形の石柱に左の五神社の名を刻み込んである。

天照大神
大己貴神
少彦名命
埴安媛命
倉稲魂命

この地神さんは徳島藩が寛政元年（一七八九年）名東郡富田浦（現徳島市伊賀町）国魂彦神社の神宮早雲伯耆の申し出によって、全藩内に奉祀し、各郡庄屋を以て祭官とし、春秋社日に祭事を行わしめたという記録が残っている。春秋の社日とはどんな日であろうか。これは春分秋分に最も近い戊の日を社日といい、この日に地神を祀る講を地神講とか、社日講と呼び農家は社日には土を動

地神さん
（壇ノ原）

かしてはいけない、すなわち畑仕事をしてはならないというタブーがあり、そして社日には当家（とうや＝当家の家）に宵の日から幟を立て、当日は神主さんをたのみ、塔にお鏡餅やお神酒を祀って祝詞を上げて豊作を祈るお祭りをした。当家の家の中では床の間に地神さんの掛軸を飾り、お鏡餅やお神酒や野菜類をお供えして地神さんを拝み、その後でお神酒をいただきながら当家が作った料理を神様とともにいただき雑談等をして時間を過したのであり、農村社会における一つの社交の場であるとともに農作業の合間の慰労の会合でもあった。

それではこの祭りが戊の日に決められたのは何故であろうか。これは十干十二支の十の第五の名であり、方角は中央、時刻では午前四時頃であり、五行では土に配する、また繁茂するの意味があるから、この意味あいから日照時間が長くなって成育が盛んになる春分の日に一番近い戊の日を選んで豊作を五神に祈り、秋には休眠に入る秋分の日に一番近い戊の日に、その年の豊作を感謝するとともにまた来期の豊作を祈ったのであろう。それではこの祀られている五柱の神様とはどんな神様であろうか。天照大神とは神話によれば天地創造の神であるイザナギの命イザナミの命の御子で、日本の皇室の祖神で、後にニニギの命を降して、日本の国土を治めしめたといわれる神様であり、伊勢の皇太神宮に祀られているが太陽を古代の人達が崇拝したその象徴であろう。

太陽は毎日毎日我々の周辺の生物をその光と熱によって、はぐくみ育ててくれるものであるとの、古代の人々の信仰をそのまま表徴した偉大なるものであって、古代に人々から尊崇されたのは当然であり、現代人である我々が、ただ単に科学的に太陽を燃焼物としか見ず、感謝しないことこそ一考を要するのではなかろうか。

次に大己貴神とはどんな神様であろうか。この方は一名オオクニヌシノミコトともいわれ、出雲神話に出て来る神様で、別名をオオナムチノカミ、アシハラシコオノカミ、ヤチホコノカミ、ウツシクニタマノカミ等とも称される。この神様は仁慈の心の深い神様でまた大いに殖産を奨励して国土を富ましめられ、後に天孫に国土を無血献上されたといわれている。

これは史実としては土着の王が新しい主権者に政権を無血に譲ったがために、新しい主権者がその王を譲渡の代償として神として祀り、またその国土の人民達が大国主命である王をしのんで、神として崇びしたったことであり、これが神話として語られているのであろう。

また少彦名命　とはどんな神様であろうか。大国主命と兄弟の誓をしてその国土を経営し、禁厭、医業の道に秀で蒼生を利し給うたといわれている。大国主命の殖産に対して健康等をもたらす神ということで二人合せて豊かな生活と健康な日々を送れるようにする神様ということであろうか。

地神さん
（八幡神社）

次に埴安媛命とはどんな神様であろうか。ハニとはきめが細かくて、ねばりけのある黄赤色の土のことであり、これで陶器や瓦を造ったり、また衣にすりつけて模様を表したりしたのである。また土は生物の根元とする意から五穀豊饒の神ともせられているが、それは古事記本文にイザナギの命が死のうとする時、土の神埴安媛と水神を生み、この神の頭上に蚕と桑、臍の中に五穀が生じたと書かれているから、土全般の神様であろう。

最後に倉稲魂神とはどういう神様であろうか。稲荷神社の項にもあるように宇迦之御魂神大倉津媛神と同じ神様であり、食物の神、即ち農業神である。

要するに以上の五神で、人間が生産に従事して健康に生活し、豊かな生活を送って行くための全部の必要条件を満たしてくれる神がそろっているということである。なおこの地神祭りは西麻植地区でも今も残っているが麻植市講中の文政年間の記録が残っているので記してみよう。

文政七年甲申年

地神社　　農作講中

二月吉日

地神講諸名面

麻植市大豊作組

一、寅　　郡　泰太　　一、亥秋当り　　河野　武助
一、戌ノ秋当り　　河野　順吉　　池内　村次
一、丑ノ穐当り　　品蔵　　一、酉ノ八月当り　　磯　次　郎
一、子　当　り　　利三右衛門　　一、丑ノ二月当り　　福見伊兵衛
一、申春当り　　佐　代　次　　一、寅　八月　　木村重次兵衛
一、亥　　善　兵　衛　　多田喜三太
一、戌とし二月当り　　五　蔵　　文　太

右講備物五穀鏡一重神酒会合之節草吸物二而酒三献相廻し申筈ニ相究候

右講内

拾弐月

庚申塔

全国の津々浦々に庚申塔が祀られているが、我が西麻植にも沢山の庚申さんが祀られている。

中筋の足立さん宅の裏の辻
中筋の小倉富夫さん宅の裏の辻
麻植市の多田定夫さん宅の所の辻
西麻植小学校の南の橋の南岸
広畑の岡さん宅の所の辻
広畑の麻名用水の橋の北方二〇米の辻
吉野川遊園地の東南二〇〇米の辻

右のように七か所に祀られているが、この庚申信仰が行われだしたのは平安時代といわれ一般に信仰され出したのは江戸初期からといわれている。阿波では明暦年間（一六五五～一六五八年）頃に各村に庚申塔を

庚　申　塔
（中　筋）

庚　申　さ　ん
（小学校南）

建てよと藩の指令が出たことが記録にある。当時藩としては旧慣を守ることが大切であるとの理由で庚申待と称する講を持たせたというから、やはり前々からこの信仰行事は行われていたのであろう。そして藩としては庚申の本尊を大麻比古神社の祭神である猿田彦神としたといわれている。また六十日目毎に廻って来る庚申の日を祭り日として各部落毎に行事が行われた。当地でも昭和十年頃までは行われていたが、現在は止まってしまい、古老の想い出となっている。

この庚申信仰の起源は中国の道教に発するといわれるが、それは人の身体の中に三尸という虫がいて庚申の晩に本人が眠っている間にその身体から抜け出して、天に登り、天帝にその人の悪い行為を報告するが、その罪の軽重によって生命を短縮させるといわれるから、庚申の夜は徹夜して修業にはげんだといわれている。三尸の虫とは次の三つである。

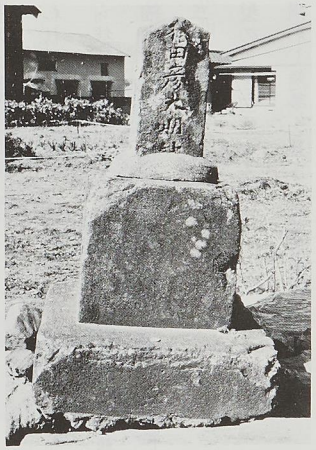
(イ)　上尸は人の頭にいて目を暗くし皺を作り髪の色を白くする。

(ロ)　中尸とは腸（はらわた）について五臓を損わし悪夢を見さし飲食を好むという。

(ハ) 下尸とは足に居り命を奪い精をなやますといわれる。

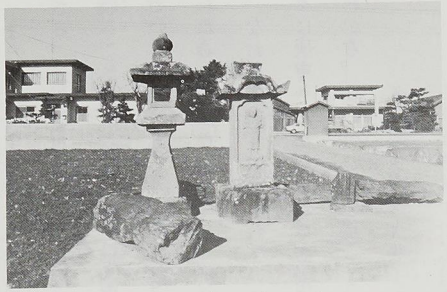
それが庚申の晩に眠らず三尸の名をとなえておれば、禍を転じて福となすとされているので、中世頃から中国では貴族社会に伝わり「花園院震記」に正和二年（一三一三年）八月二日の条に「今夜睡眠せず終夜庚申を守る和歌会密々有之…」とあるところから察しても、盛んに行われていたことがわかる。また秘密に和歌会などをして精進を怠っていたし、又和歌会をした人達も習俗を守ってはいても、三尸の虫の事も迷信ということがわかっていたようで、なかなか面白い記録である。

室町時代からは供養塔を建てることが始まり、江戸時代には庶民の間に浸透し、また仏教で守護神として信仰せられている帝釈天の使者である青面金剛がこの世界へやって来て、人々がどんな善行、悪行をしているかを調べ、それを天にもどって帝釈天に報告するという信仰とが習合して信仰が拡まったといわれている。



庚申さん（広畑）

この供養塔は庚申供養塔という字が刻まれたもの、青面金剛像が刻まれたもの、三猿すなわち見ざる、云わざる、聞かざるの像を刻みこまれたもの、それに日月を合せたもの等がある。ところで前にも述べた庚申の神像と密教で奉ずる青面金剛とは、何等関係はないが、仏教では青面金剛法に「伝尸病を除く秘法とは「第九青面金剛呪法」に伝尸気病患う者呪を誦ずること千遍せば其の病即ち愈ゆ」とあり、この伝尸が道教の三尸の語と音がよく似ていることから、庚申と青面金剛とが結びつけられたものであろう。帝釈天の神使は猿といわれているが、庚申の申をさると読むことから、三猿が結びつけられたものでもあろう。そして又嚮導神として信仰のある猿田彦神とも結びつき塞の神、道祖神とも混用されたのであろう。西麻植の場合でも小学校の南方以外では、全部三差路または四差路の辻にあって道祖神として祀られたことがわかるし、学校の南の分も恐らく橋の北側の四差路の所にあったものを用水路か学校を建設する時に現在地に移動したものであろう。



庚申さん（江川）

またこの庚申の三猿も徳島藩の藩政の一環として利用したのではないだろうか。それは三猿の見ざる、云わざる、聞かざるは百姓達は苛酷な藩政にも目をつむり、口を閉じ、耳をふさいでいろということであろうか。話は庚申さんの晩にしろということわざがあるが、話をする暇があったら働けということであろう。げに悲しきは百姓達の常である。このことからも藩の封建的な政策がうかがわれるのではないか。

なお庚申通りといわれている通りがあるが、これは古い道で、この道を通れば必ず村境の所や辻々に庚申さんがあるのであって、これは村の主要な道筋であったということが現在でもはっきりとわかる。

野の仏お地蔵さん

全国津々浦々どこへ行っても道路縁にお地蔵さんは慈悲に満ちた温顔をして、我々をやさしく眺めてござる。廃寺十力寺跡にも六地蔵さんが北に向いて、風雨にさらされながら座ってござる。その西の方の東禅寺墓地への入口の辻にも何時も誰がかけて上げるのか赤いよだれかけをかけて温顔

をほころばしてござる。麻植市郷の東端には屋根つきの立派なお堂の中にひっそりと祀られている。また唄にも和讃にもよく歌われたり、誦せられたりしている親しみ深い仏さんであるが、その中から二、三あげてみると、

泣けた　泣けた
こらえきれずに泣けたっけ
あの娘と別れた悲しさに
山のからすも泣いていた
一本杉の　石の地蔵さんの
村はずれ

これは春日八郎さんの「別れの一本杉」の一節であるが、のどかな田舎の郷愁に満ちた風景が目の前に浮かんでくるではないか。

関の地蔵さんに団子あげて　どうぞよいやや出来るよに
そこで地蔵さんのいうことにや　団子あげずに餅あげた　スットトン　スットトン

お地蔵さん
（東禅寺）

これはスットトン節の一節で面白く地蔵さんを表現しているが、俳句の題材としても、おだやかな温顔と、のどかな野の仏ということで、よく作られるが、そのゆったりとした温容は自然に親しみを覚える仏さんではある。教科書の民話にも使われ、文部省が廃止しようとしたが、反対にあって廃止できなかったのは、やはり地蔵さんのやさしく温かいお顔のせいであろうか。しかし地蔵和讃の文句となると胸がしめつけられるようになる。

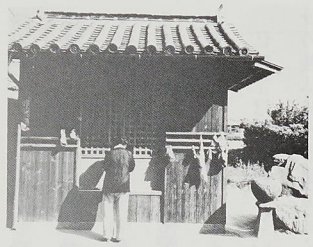
これは此の世の事ならず　死出の山路のすそ野なる　賽の河原の物語
二つ三つや四つ五つ　十にも足らぬ幼な児が　賽の河原に集まりて
峰の嵐の音すれば　父かと思いよじ登る
谷の流れを聞く時は　母かと思いはせ下り
手足は血潮に染みながら　川原の石を取り集め　これにて回向の塔を積む
一重積んでは父のため　二重積んでは母のため　兄弟わが身と回向して
昼は一人で遊べども　日の入りあいのその頃に　地獄の鬼が現われて
幼きものをにらみつけ　汝等みなが積む塔は　いがみがちにて見苦しし
かくては功徳になり難し　とくとくこれを積み直し　成仏願えとしかりつつ

鉄のしもとを振り上げて　積みたる塔を打ちくずす
あらいたわしや幼児は　またうち伏して泣きさけぶ

そしてこの時が地蔵さんの出番となり、この子供達を助け導き遊んでくれる

汝ら命短かくて　冥土の旅に来たるなり　娑婆と冥土は程遠し
我を冥土の父母と　思って明け暮れ頼めよと　幼き者を御衣の
裳裾の内にかき入れて　憐れみ給うぞ　ありがたき

慈愛に満ちた仏さんということである。


お地蔵さん
（東麻植市）

四国八十八ケ所の阿波分では第五番地蔵寺、第十九番立江寺、第二十番鶴林寺の三寺の本尊さんが地蔵さんであり、また寺という寺には必ず地蔵さんがまつられているが、この慈愛に満ちた地蔵さんとはどんな仏さんであろうか。

地蔵さんは釈迦が仏教をおひろめになった以前のアーリヤ人達が印度に侵入して来る前から彼等の間で信仰していたといわれる。サンスクリット語でクシチガルバといい、クシチは大地、ガルバは母

胎を意味するから即ち母なる大地即地母神に外ならない。神話学者が指摘しているように、大地は生命の根元である。大地はすべての植物、動物を生み出す母胎であり、同時にまたそれ等が枯れ死して元に帰る所でもある。即ち大地は生と死の還流の土台であり、天を父と考え、母を大地と考える古代からの思想とも習合されて、母は子に大慈悲心を持っているのと同じように、地母神である地蔵さんも大慈悲心をもって衆生の苦しみを救ってくれると信じられていたのであろう。

仏教では地蔵菩薩といわれ、釈尊の入滅後五十六億七千万年後の弥勒仏が登場するまで、即ち来世の無仏時代の間煩悩に苦しむ人々を救うために出現したものであるという。印度ではあまり信仰されなかったが、中国では唐の時代七世紀後半に現れ韓国方面では地蔵像が八世紀中頃になって現れ信仰され、日本では十世紀に入って初めて天台宗の坊さんや、貴族社会に信仰されてきたといわれる。江戸時代初期になって、さらに六道を巡って衆生を救い導くという信仰から六地蔵信仰を生み、また現世利益を願う信仰から子安地蔵、子育地蔵、間引地蔵、水子地蔵、おこり地蔵、咳取地蔵、勝軍地蔵等あらゆる人生の悩みを解決してくれる地蔵信仰に発展し、果ては道しるべや村境の守り仏として、他の地域から病気や農作物の害虫が入って来ないようにとの願いをこめて、村の出入口や辻に祀られるようになったのである。

光明真言読誦塔

麻植市の庚申さんと並んで台の上にあるが左図の通りである。

○明治十八年乙酉歳九月上○
奉修光明真言一百万遍供艱建塔
麻植市講中
○天下太平　国主安穏

光明真言読誦塔と庚申さん
（西麻植市）

真言密教ではその神秘性を保持するために、梵字や真言（呪文＝ダラニ）を梵語そのままで読誦するのが通例で、光明真言もその一つであって二十三の梵字から成っている。

オンアボキヤ　ベイロシャナウ　マカボダラ　マニ　ハンドマジンバラ　ハラバリタヤ　ウン

これはどんな意味であろうか、梵字字典を引いてみると、

オン＝帰命の意で自己の最も大切な生命を三宝（仏・法・僧）にささげて信仰すること。
アボキャ＝大悲心で衆生を済度すること。
ベイロシャナウ＝大日如来の加護
マカボ　ダラ＝大きく印す
マニ＝宝
ハンドマ＝蓮華
ジンバラ＝光明
ハラバリタヤ＝功徳のあること
ウン＝満願とか望みがかなうこと

とあり「大日如来よどうかあなたの力で我等に加護をたれて、救って下さい」という意味であろう。そしてこの真言を誦すれば一切の罪障を除き、この真言で加持した土砂を死者に散ずれば、極楽往生疑いなしといわれ、南北朝時代に初めて光明真言結集の造塔を見たといわれている。このように単に読誦しただけでなく、その行為を永久に刻んで人々の一切に罪障を除き現世の幸福と来世の極楽切符を得る事を願った庶民の願いをこめた信仰の名残りであるとともに、貴重な文化財でもある。

なお十カ寺前にも最近まで一基あったが何処へいったか失われている。

お遍路さん

西麻植は四国遍路の道であり、故郷であり、また遍路の里といってもよい。お遍路さんに年がら年中縁のあった里であるとともに、ただ単に明日をも知れない人生をその日その日を生きて行くために金や物をもらって歩く憐れなへんど達の道でもあった。

迷故三界城
悟故十方空
本来東西無
何所有南北

と同行二人それに住所氏名を書き入れた管笠を着て、同行二人（お大師さんと二人の旅の意）と書いた金剛杖をついて白装束に身をかため、さあ出発だ。

納　経　帳

家内安全を祈る人、病気をなおしてもらうための人もあろう。来世の極楽切符を受け取るための人もあろう。いろいろな境遇、男女の別、職業の別、年齢の差、知識の差によってその目的が異なるであろう。何処かの寺に「悟りは迷いの道に咲く花である」とあった。

人間も年を取ってくると淋しい。ああもう八十才まで生きるとしても後五年しかない、この世から五年でお別れか、いとしい妻子や可愛いい孫と後五年したらさいならか。あと五年したらどんなに泣いても叫んでもわめいても、火葬場で焼かれるのかと思うと、心臓がしめつけられるようになってくる。しかし人間死ぬのがあたりまえで、死ぬために今日一日を生かしてもらっていると考えれば心が静まり落ちついてきて何かゆったりとした気分になる。おかしいものだ。言葉と考えのマジックであろうか。悟りというには勿論程遠いものだが……またすべて理論的に考えたがるのが近代人だが、仏教に対しても懐疑的で信仰とまではなかなかいかないのが実状である。何処かの寺でこんな道歌を黒板に書いてあるのを「ええ教えだなあ」と暗記して今でも覚えているが、その歌は

〝抱かれていながら我は反抗す
　大きく広き御仏の掌に〟

み仏はだまって、唯々我が掌に我が胸に跳び込んで来なさい。心の安らぎを与えてあげますよ。と

慈悲の掌を何時何処でも差し延べて抱いてくれようとしているのに、化学万能の教育を受けている現代人は何か割り切れない心の障害があって仏に近づけないのが実情であろうか。

昔の何の知識も無く、批判力もなかった人達は、素直に仏の胸にただただ救いを求めてとびこんでいったのに……ほんとに素直に……。

それはさておき春が来ればタンポポやレンゲが咲き乱れた田園のこの西麻植の里は、四国八十八ケ所の第十番札所の切幡寺と第十一番札所の藤井寺との通路にあたり、順打（第一番から正式に順番にお参りすること ― 打つとは昔は納め札は木の札で釘で打ちつけた）逆打にしても、どうしても通過せねばならない土地である。今でこそ自動

お遍路さん

車を利用しての旅であるが、昔は粟島渡しという、県営の渡し場があってそれを利用して粟島の白川さんの所へ出て、鉄道のガードの処を通り抜け、西新田の阿部さんの所を南へ折れ、江沢さんの所の県道へ出て、追分から南へ入り山沿い道を東へ、そして廃寺十カ寺の方へ入り、そこを東へ、また南へ入って八幡神社の大鳥居の北側を東へ行き、現飯尾街道の旧道である細い道を唐谷の橋へ出てテクテクと歩いて行ったのである。

昭和初期頃までが巡拝の最も盛んな時で、その最高人数は三十万人といわれている。勿論当時は食えなければ四国へ渡れば食べるだけは食べられるといわれたくらいで、物乞い遍路も多く、また気の毒なライ病患者の人達も国の収容施設がなく、医療も進んでいなくて治らないものとあきらめさされ、また業病ともいわれ、家族からいいふくめられて、家のために一生故郷へは帰らない旅に四国遍路として出て来た人も多かったのである。

我々子供の頃はその気の毒な人達が、切幡寺では春と秋の中日さんには参道の両側に何十人もが坐って参詣の人達から喜捨を受けていた。

なお当時はお接待といって各郷やお大師講組がお遍路さんにお寿司や蜜柑、米、ちり紙、おこわ等を施して、お遍路さんにその人達に代ってお参りしてもらい、御利益を分けてもらうための行事

をしていた。またそれらの人達もその日は酒を飲んだり、ご馳走をたべたりして、一日を楽しく過ごした庶民達の慰労の日でもあり、節句の翌日の「しかのあくにち」の日によくしたものである。

レンゲやタンポポや菜の花が、野の道端や田や畑に咲きそろう頃が、遍路の盛りで「娘さんはお四国をすませんと嫁にはいけん。」という諺がある通り、人生の花盛りの娘さんも赤い蹴出しをちらつかせて、お色気たっぷりに若い男達と血をたぎらせつつ列をなして歩いて通った春の風物詩が今でも胸をくすぐるような、なつかしい想い出として残っている。

巡礼の道と道しるべ

大正の頃までは徒歩で八十八ケ所参りをしていたが、西麻植がちょうど第十番切幡寺から第十一番の藤井寺への道筋であったので春の最盛期には白装束の巡礼達が列をなして通ったもので飯尾街道が出来た大正十年頃までは狭いたんぼ道ばかりを通っていたのである。現在もその道すじに道しるべが立っている。

新田の江沢さんの北側と追分の二カ所にある道標には世話人中務茂兵衛さんの建てたのがある。

道しるべ（新田）

江沢さんの前の方のは四国巡拝壱百五十七度目の供養のために、また追分にあるのには壱百九拾弐回目の供養のためにと記されているが一回も廻らないで死んで行く人が多い中でよくも歩いたものである。

実はこの人は二百八十回も廻っているのである。

茂兵衛は弘化四年（一八四七年）四月三十日周防国大島郡椋野村（山口県大島郡久賀町椋野）の庄屋中務次郎右衛門と妻ヲフミの三男として生れた。この大島は島一つで郡をなし別名を屋代島といい瀬戸内海では淡路島、小豆島についで三番目に大きい島である。

彼の従兄弟に勤王の志士世良修蔵がいるが、彼より十二才上で、萩の藩校明倫館に学び後世良家の養子となり騎兵隊軍監として大いに活躍した人である。茂兵衛は十九才の時発心して四国に渡り五十一番の石手寺より打ち始めているが、三十回目の明治十年三月五日七十六番札所金倉寺の住職松田俊順師によって得度し爾後富士山、大峰山、葛城山等へ入峰修行をしたりして修行を積みながら、明治十五年末にはすでに六十五回も廻っており、彼の修行が如何にきびしかったかが想像でき

る。また彼は先祖代々供養のためと後世の遍路のために、巡路の案内の道しるべ建立を発願している。そして四国巡拝だけでなく、西国三十三ケ所を三度も巡拝しているのである。茂兵衛の遍路中の宿は「四国霊場連合会指定、一〇中司（この司の字を使用していた）茂兵衛定宿」と板三尺で造られた看板を立てていたくらい有名で、首から長い珠数をかけ、あごひげをたらし、聖者そのもので行く先々で祈祷をしたりして尊敬されたと伝えられる。大正十一年三月二十日滞在中の高松市通町一の七番地久保チカ方で大往生した時は七十六才であったといい今は彼の生家の墓地に静かに眠っているが、死後も伊予辺りからわざわざ遺品の珠数等を拝みに来ていたそうでその信仰の深さが彼自身や彼をめぐる人々の間にはかりしれないぐらい大であったことが想像される話である。

道しるべ（追分）

六部と遊行聖

大正の頃までは、数多い四国遍路にまじって時々六部さんと俗に呼ばれていた聖がいた。藩政時代頃まで正式の聖も多かったが、明治、大正には大方遍路に近いものであったと思われる。

この六部とは、昔の六十六部信仰の略語である。この人々のなかには、信仰によって路銀がなくとも国々を勧進（人々に勧めて仏道に導き善に向かわせること、社寺や仏像の建立、修理等のために広く人々に勧めて寄附を募ること、出家姿でものをもらって歩くこと転じて単に施しを受けたり物乞いをする場合もある。）しながら廻る者も多く後には乞食の代名詞にもなった程であるが、事実我々の子供の頃の目にも物もらいと思われていた。この六部は白衣を着て背中に仏像の入った厨子や笈摺を背負い家々を廻ったもので、年老いた六部が夏の暑い日に背中から厨子を降ろして道端で休んでいたのを思いだす。

また空也念仏といって空也上人の弟子となった平定盛が師の教えにより瓢を叩いて念仏したのが最初といわれる念仏踊がある。鉢叩きともいわれ鉢もたたいたそうで八十八か所のあるこの四国にも訪れたそうであり、松山市の浄土寺にその立像が残っている。また西行法師も全国を廻ったが四

国に来たこともあり、ここ西麻植にも来て蟹泉（旧十力寺の東南五〇メートル）で歌を詠んだとの言い伝えが残っている。

この遊行聖達は喜捨と奉加や善根宿（善行を行えば必ず善い果報があるという思想によって遊行僧等に無料で宿を貸したこと）によって諸国を廻ったのである。そのお礼に鉈彫りの仏像等を置いて行った円空や、木喰行道のような聖もあるが特技がなくとも仏壇にお経さえあげればうすぎたない聖でも喜んで迎えられた。

善根宿等は四国遍路にまで及び土地の人は遍路に一夜の宿を求められれば一夜の宿を貸して善根をほどこしたのであり、もしこれ等の人々の求めを拒絶すれば天罰が下るものとその人達にふきこまれ、それをよいことに強引に宿をかりた高野聖（元来は高野山の奉加や真言宗の布教に廻ったのであるが、しまいにはそれをよそおったりまた祈祷をして廻り生活を立てていた）は、宿借聖あるいは夜道怪などと呼ばれ、また護摩を焚いた灰を万病に効くといって人々にさずけてお礼をもらって護摩の灰といわれていやがられたりした。しかし人々は心の中にはだまされながらも心底から仏を信じて宿を貸し、また喜捨を続けていたのである。

お百度参り

どこの神社にも鳥居や山門の所に百度石と書いた立石が建っているが、これは重病人が出た場合、親戚の者や隣家の人達の老若男女が何十人も集まって、病気の平癒を祈りながら、列を作って本堂前からこの百度石までの間を百回廻る行事であり、これは大正の末頃まで西麻植の土地でも行われていたのである。

この行事は「永昌記」や「中右記」という平安時代に書かれた本にも残っているそうで、古くから行われた行事であることがわかる。またこの行事は同一神仏に百日続けて参詣する場合と、一日に百回参る場合とがあったそうであるが、当地でも一日に百回参りをして病気の平癒を祈ったのであろう。

百　度　石
（八幡神社）

十万寺の百万遍

百万遍とは百万遍念仏の略語で百万遍念仏を唱えること、即ち念仏とは弥陀の名号である「南無阿弥陀仏」を唱えることである。大正の終り頃まであったそうであるが、涅槃会（お釈迦さんが入滅した旧二月十五日）の日に本堂の八畳の間一杯に檀家の者が集まって大数珠の周りに円陣を作り「ナムアミダブツ」と唱えながら大数珠を百回繰り廻す行事であった。各人の所に結び目が来たら頭の上に持ち上げては拝んだがこの行事は半日もかかったそうである。

むろんこれは先祖の冥福を祈るとともに家内安全や病気平癒を祈願する行事であった。それで重病患者が出た場合は、隣りや親戚の者達が寺に集まり、心からの平癒を祈るため特に厳粛にこの行事が行われた。

万　人　講

頼母子講が村々の庶民金融制度として発展したが、その外に万人講という金融制度があった。

これは農家が農耕用のために飼育していた牛や馬が病気等で死んだ時に、沢山の他町の人達にまで供養を依頼して金を集め、その金で新しく牛馬を購入する資金としたが、このしきたりは大正の末頃まであった。

また牛馬が死んだ時に頼母子講を作って牛馬の購入の資金にしたが、これは牛馬が死んだ人に第一回目にその金を割りあて、その人は二回目からぼつぼつと返済する方法を取ったもので、この方法は共済制度の充分でなかった時代に、相互に助け合って生きてゆく生活の知恵であった。

お大師講

お大師講とは地域の人々が小さな区域ごとにお大師さん（弘法大師）を信仰する人々で作っている講組でお大師さんを信じそのお蔭をこうむって家族の無事息災や先祖の人々の冥福を祈ることを目的とする会である。

毎月特定の日に当家に集まり、お大師さんの尊像を床の間にかかげて山海の珍味やお神酒等をまつり般若心経や光明真言を唱え、後で当家がこしらえた夜食を食べながら、生活共同上の申し合わ

せや、いろいろな相談ごとをしたり雑談をして夜を過した。また最近は毎月金を積立ててその金をためて年に一回ぐらいみんなで信仰の旅であるお四国参りや、西国三十三か所参りをしたりしている所があるが、この習わしも次第にすたれ現在西麻植地区で残っているのは西麻植市と田渕の組だけになっている。

また大正の末頃までこの大師組で春にお寿司やお赤飯を作ったり、あられ等いったり、またお菓子やみかん等を四国遍路の人々にお接待をしていたが、お遍路さんから必ずそのお返しにお札をもらって、そのお札をその部落内の庚申さん等に縄にはさんでおまつりしていたが、そのお札をもらうことは、その講組の人々に代って接待された遍路さんにお四国を巡ってもらうということであり、庚申さん等にそのお札を納めたということは、お四国参りの御利益の上にその組やその部落の人々の無事息災や豊作を庚申さんに更に祈るということにあったのであろう。

頼母子講

鎌倉時代の「たのもし」「憑子」と称する特殊な互助的無利息融通組合から一般化して、江戸時代

の庶民金融の一つの方法として普及した。本来は一団の人々が少しずつ金や穀物を出し合い、それをグループの中の困った人に融通して救済するものであったが、次第に社寺の維持修繕や参詣費用の調達に利用されるようになった。組織は親と呼ばれる発起人と数人ないし数十人の仲間で結成され、定期にそれぞれ引き受けた口数に応じて金額の掛け込みを行い、くじ引き等の方法で順次金銭の給付を受ける仕組みである。

大東亜戦争の終わりごろまでは県下でも非常に盛んであったが、西麻植地区でも親元を商売にしている人もあり盛んであった。終戦後からは次第におとろえて現在は一件も残っていない。家が焼けたとか、飼い牛が死んだとかの場合は、付近の人々が講組をつくり、その家の救済にあてたりして相互に助け合ったのも今はもう昔語りとなってなつかしい想い出となってしまった。

第二節　年中行事

涅槃会とダシ

涅槃会とはお釈迦さんのなくなった日を追悼して行う法会であるが旧二月十五日に、現鴨島町の禅宗の寺が年々交代で法会を開いて釈迦の供養をしたものである。

禅宗の寺であった西麻植の十カ寺もこのグループに入っていて、当番に当った日は遠方からも人々がお参りに来たものである。

当日はダシという人形を作って飾ったり、市が立ってにぎやかであった。そのダシには今の菊人形のような時代物の物語の人形もあったが、地獄・極楽の様相を形作ったものがあり、地獄の火車に乗せられた人形とか針地獄等もあって「悪いことをして死んだら、こんな所へエンマさまにつれて行かれるんでよ。よう見ときなよ。」とおじいさんやおばあさんに言われ、手をひかれながらこわごわ見た恐ろしかった想い出が今でも目の前に浮かんでくる。

雛まつりと四日の飽日

雛まつりとは三月三日に女の子の健康と幸せを祈るため人形を飾っておまつりをした行事で、俗に桃の節句ともいった。雛段を飾り桃の花を供えその他のお供物をして一家そろって仕事を休んで楽しんだ日である。

シカノアクニチとは四日の飽日とも鹿の悪日とも書かれたが三日同様に仕事を休んでこの日は遊山といって重箱に巻すし等の料理を入れて、河原や山へ一家そろって遊びに行ったもので、男の人は留守が多かったようである。

シカノアクニチの語源は、はっきりしないが四日の四を死の発音に通ずるものとし仕事を休むように忌み日であるとこじつけて、この日仕事をせぬように四日の悪日として遊ぶ日としたといい、また山に遊びに行った人たちのご馳走の残りに多くありついて鹿がお腹をこわすから鹿の悪日といったとか、鹿もご馳走の残りを飽きるほど食べたからこんな言葉ができたといったり諸説紛々としていてわからない。

なおこの日は各郷で「お接待」といって、家々から集めた金や米でお寿司をつくったり赤飯をつ

くったり、米そのままや、ちり紙、はがき、わらじ等を四国遍路に接待したものであるが、郷の人たちはこの日にはお接待と酒、弁当で遊興をかねた楽しい行事でもあった。

彼岸の中日さん

彼岸とは春分と秋分の当日（彼岸の中日）をはさんで前後各三日の七日間に行われる法会である。また彼岸とは涅槃界のことをいい迷いの此岸から悟りの彼岸を指していうもので梵語でパーラミターの音写は波羅密多で到彼岸と訳している。一般の信者たちは寺院に参詣・墓参し、僧は読経と法話を行って仏事を行うが、これは日本だけの行事で印度や中国では行わないそうである。

西麻植や麻植、阿波の人たちは昔は中日さんといえば必ず市場町八幡にある切幡寺へお参りに行ったものであるが、西麻植には十カ寺もあったし、西麻植の人々の檀那寺であった報恩寺や、持福寺や、札所の藤井寺等があるのにどうして切幡寺まで行ったのであろうか。いやこちらの寺へ行ってもごく少数の人たちだけしかお参りに行かなかったのであろうか。それは切幡寺が経木流しの行事をはじめたからではないかと考えられる。経木流しとは当日、経木に死者の戒名を書いて水をそそ

いで死者の冥福を祈るのである。

先祖を尊び敬うことは子孫の者たちの勤めであり、われわれの父も母も祖父、祖母も自分も子どものころにテクテクと粟島渡の船に乗って、歩いて切幡寺へお参りに行ったものである。わずかばかりの小遣い銭をもらって、のんきなとうさんや、正ちゃんの冒険や、猿飛佐助漫遊記等の豆本を買ったりして宝物でも手に入れたような気持で帰って来たことが今でも目の前に浮かんで来る。

自転車が普及しだして自転車による参拝が多くなったが最高十万人といわれる参拝者があったそうで粟島渡しも終戦前に渡し舟に定員の二倍も乗ったため転覆して多数の死者を出したことも悲しい想い出話である。最近は藤井寺も駐車場ができた関係か次第にお参りがふえて切幡寺と参拝者を分かつくらいにまでなっている。

潅仏会

潅仏会とは仏像に香水をそそぎかけることをいい、そのいわれは釈迦誕生の時、梵天・帝釈天がくだって仏の体に甘露をそそいで洗ったという故事にもとづいて行われた行事である。釈迦の誕生当

日の陰暦四月八日（行事はたいてい旧暦で行われた）に修する法会で花御堂を作って誕生仏を安置して甘茶をそそぎかけて供養する行事である。

大正のころまでは十カ寺では本堂の入口の縁側の上に大きな甘茶の一杯入ったタライを据え、その中に七十センチぐらいのお釈迦さんの誕生像を立てて、参拝者が柄杓でその像に甘茶をそそぎかけておまいりをした。

子どもたちは親からもらった五銭玉や十銭玉を握って一升びんをさげてお参りに行ったもので、お世話人がその金と引きかえにびんに甘茶を一杯入れてくれ、それをもらって帰って飲まされたものである。おそらく親としては子どもがお釈迦さんにあやかって健康に育つようにと願いをこめていたのであろう。またその甘茶で墨をすって字を書くとじょうずになるといういい伝えがあって、子どもたちもそれを信じ字を書いたものである。

また当日は天頭花といって高い竹の先に山つつじ等の花をとって来てしばりつけ高くたてて釈迦の誕生を祝福したものである。

阿波踊

〝阿波の殿様蜂須賀侯が
今に残せし阿波踊〟

と唄に歌われている阿波踊も昔は個人個人が自由奔放な格好で踊ったもので現在のように統一されたものではなかった。

明治から大正にかけて隣近所の者が、五人か六人位で組を作って、その組の人達の家の近所で踊っていたものであるが、江川には三味線のお師匠さんがいて教え子と共に三味線を弾いて組を作り、流しをしたり踊ったりしたのが目立っていた。また江川や麻植市東部では盆に廻り踊りが盛んで、昭和の初期まで踊っていたもの

阿　波　踊

踊　り　子

である。終戦後は明治乳業の従業員が組を作って、西麻植だけでなく鴨島、徳島までも踊って行ったが、最近は従業員も少なくなった関係で止まってしまっている。

阿波踊の起源はどんなものであろうか。阿波踊は中国の高脚踊と伴奏のリズムが同じように思われるし、また沖縄の宮古島辺りの精霊踊の伴奏や踊もよく似ているように思われるから、黒潮の流れに乗って、こちらへ移住して来た人達がもって来たものであろうか。起源の究明はさておき、一般には唄の文句のように、蜂須賀侯が大いに奨励して今に伝えたと思われがちだが、実はそうではない。反対にそれまでは自由に踊りを楽しんでいた民衆の阿波踊を、藩は禁令をして規制したと考えられる。先ず、入国当時は藩としては阿波踊等のように人が集まること自体を最も危険視した。

即ち多数の勢で藩政に反抗したり、一揆や打ちこわしが何時爆発するかわからないからである。

貞享二年（一六八五年）には始めて文書化された盆踊に関するお触れが出ているが、それを記してみると、

一、市中盆踊りは例年のように十四日から十六日まで許可。

二、家の火の用心を厳重にすること、踊りは夜半以後は禁止。

三、踊り場に出る者は頭巾、覆面、笠等顔をかくすようなものは厳禁。

四、家の中からすだれ越しや戸障子を立て、物蔭より見たり格子の中から見たりしてはいけない。

右の条文を見れば今の治安維持法の藩政版ではないか。その後藩としては農民一揆等もあったのでいろいろと禁令を出したりして慎重に事を構え、事件の発生を防ぐ万全の処置を講じたものである。皮肉に考えると、この踊りを唄の文句にあるように藩としてはただ禁止せずしかたなく残してくれたということである。

秋祭りと屋台

明治から大正初期にかけての西麻植の祭りは賑やかで威勢がよかった、十月の十九日が八幡神社

の祭りで、翌日が中内さんと続いた。後には二十九日と三十日となり戦後に鴨島町が統一して現在のように二十五日に統一されたが、明治末期や大正時代は宵祭りと本祭りの三日間は南組（田渕・中筋）江川（江川・広畑）麻植市、新田の共同のものと粟島のよいやしょとの四台の屋台が出て、にぎやかに西麻植中を肩にかついでねり廻ったのであるが、現在は麻植市の主屋といわれた工藤源助氏から寄附してもらった屋台が一台きりで、しかも車付であるが、子供達がこれを引くのを大きな楽しみとしていて、その当日はなごやかでほほえましいが、昔の威勢のよい姿は見られない。

祭りの日が近づくと昔は各郷では打子の稽古の音が毎晩風に乗って聞こえてくると、子供達は勿論、青年や大人達までが各郷の稽古場へ集まり、打子と共に夜長を楽しんだものである。

子供達は宿題なんかのやぼなものが無かった時代、無論ラジオもテレビも無かった時代なので、こんなものが夜の最大の楽しみであった。

八幡さんの祭り当日が来ると御神輿かきと四台の屋台の打子が先ず八幡神社拝殿で神主さんからお祓を受けて後御神楽を奉納し、村内をお旅する御神輿に続いて、当屋組の屋台を先頭にして、列を作り村内を廻ったが、四台の屋台共、かき屋台であったので、けんか祭りの名の通り屋台のぶっつけ合いをしたり、かき子同志が酔った勢で血の雨を降らしたり、ワッショイワッショイの掛声で

走ったり、サアセイサアセイの掛声で屋台を高く差し上げたりして、血湧き肉躍るといった形容の通りの威勢のよい祭りであった。

当時は大部分が農業で生計を立てていて、かつぎ荷になれていたので肩の力が強く三日間かつぎ通しても平気であった。

屋台のバチの打ち方にはいろいろあるが、その内の二、三を紹介してみよう。

一、トコトン　トコトン

（鉦に合うまでたたく、何回でもよい

〔以下同じ、略〕）

トコトン　トコトン　トンカココカ

トンカココカ　カカトンカカカ

（右の二行だけ後記した二番以下変える）

秋　祭　り　（麻植市郷）

トコトン　カカスコラカ

トコトン　カラララ

カカトンカカカ　カカスカラココカ

トコトン　トコトン

（鉦と合うまで何回でもよい）

二、トンカカ　トンカカ　トンカココカ

トコトン　カココカ　トンカココカ

三、トンカココカ　トンカココカ

トーン　トーン　カカトンカカカ

四、カカトコトン　カカトコトン　カカトン　カカトコ　カカトコ　カカトコ

五、ボーボーボーボー（左手のバチで太鼓面をおさえる）

トンカココカ　トコトンカカ　トンカカカ

六、トコトン　カラカラ（両手のバチで太鼓の縁を廻す）

トコトン　カラカラ（右同）

第三節　物　語

義太夫の話

阿波の人形芝居と浄瑠璃は、淡路のそれと並び称されて伝統芸能として大正の頃まではなかなか盛んであったが、西麻植でも大きな家ではたびたび太夫さんを集めて今のカラオケ大会のように会を催していた。

伊藤喜平（芸名喜楽）、河野藤十郎、植村雅一、藤田直蔵、大塚昇太郎、平島儀平等の人達が語っていたが、ラジオもテレビも無かった時代で、義太夫全盛で雑誌等の口絵には毎号女義太夫の豊竹呂昇の写真が飾られる位人気があり、義太夫、義太夫で明け暮れていたのどかな日々であった。

会があると店と表の間の障子や唐紙を取り除いて大広間にした所に、いつも一杯の人だかりで、その家からサービスに出されたお煎餅をかじり、お茶を飲み、阿波鳴の巡礼おつるに涙を流しながらも、のんびりと夜長を楽しく過したものである。

明治の倹約申合わせの話

現在の日本の国民生活は世界のトップクラスで家々に自動車を持っていない家は無い位であるが、大東亜戦争直後や戦時中は特に生活程度が低く、つつましい生活が美徳とされた。

明治の頃は農業が主であって、無論生活も地味であったが、当村でも左のような申し合わせの文書が残っているので紹介しよう。

西麻植村節倹法申合規約

おおよそ国の内外を論ぜず世の古今を問わず国を治め家を斎ふものは勤倹をこれ本とす。古語に曰く国奢なれば、之れに示すに倹を以てす、国倹なれば之に示すに礼を以てす、また曰く克く家に倹たれ、また我国旧幕府徳川の祖先家康公、かつて諸臣に示すに五字七字の戒めをもってせり、曰く「上を見るな」曰く「みのほどを知れ」これ即ちいわゆる身の分限を守れというに外ならず、然るに今や我国西洋の文物を輸入すると共に華美驕奢の風を移殖し、上顕官紳士のなす所奢侈の弊風ようやく民間に普及し、郷村僻陬の間に至るまで、衣食住を始め、婚姻葬祭より其他諸般の事態、皆な家康公の、いわゆる身の程分限を忘却したるものの如し、今にしてこれが弊習を矯正し専ら冗費

を省き節約を勧め金穀財産の貯蓄を図り凶年餓歳後の備えをなさざれば実に不測の困難に陥落せんこと火を見るより明々なり、ここにおいて我西麻植村は貴賤富貴を問わず益々交情を厚くし礼節を乱さず倍々心を同じうし力を合せ共に自ら盟って将来福利生活増進し衣食住の三つのものを将来に完全ならしめんがためにここに挙村の合議を以て此規約を制定す。

第一条　我西麻植村を限り拾弐戸以内を以て一組となし組毎に組長を一名置き組長はその組内へ倹約の方法を懇篤説諭し此規約に関する一切の権を掌らしむるは勿論、時宜により村長より組内に関する事件に付委托を受くる時は親切に周旋をなすものとする。

但し組長選挙は村長に委托し村長の指名推選を以て選定するものとし、任期は二か年とし最も再選重任することを得。

第二条　他町村より神仏勧化をはじめ拝礼または万人講等に関する出金は一切廃すべきものとす。

第三条　祭礼の節神事に随行する屋台は当分の間休停し神前において神楽にて神事執行をなすものとす。

第四条　遍路、乞食、合力等の戸外に立つものあり、彼等のために往々賊難に遭遇し種々罹災少なからざるにより物もらいに対し一切施行なさざるものとす。

但し右等のもの及び強売者等の断りに応ぜざるものは直ちに巡査の立会を請い追っ払いを求むるものとす。

第五条　在来の遍路等に接待（飲食物施行するを云）は将来廃止するものとす。

第六条　演劇其の他興行等は一切営まざるものとす。

但し場所により地神祭り等は規約会の議決による。

第七条　祝賀及び見舞等に金銭物品等の取りやりは一切廃止し、口述及び名刺を以て交情を欠がざるよう致すべきものとす。

但し親戚は勿論恩義功労をむくゆる為謝礼をなすは此の限りにあらず。

第八条　婚姻及び葬式の節手伝、賄い客等親戚は勿論組限りとす。

但し止むを得ざる場合は組外といえども雇入るるものあるべし

第九条　葬式の際香料の取りやりを廃し組内は香料当日限りとし、一周忌を始め以来仏事は親戚のみにてなるだけ倹約に執行をなし右例の通り膳等は一切停止すべきものとす。

但し組合外にして悔みの為参集し及び野辺見送り等は勝手たるべしといえども膳部賄等は禁ずるものとす。

第拾　条　葬式は何宗を問わず大略し棺のみにて野辺送りを行い従来の葬台を止め其他附属の用具は成るだけ省略すべし、且つ導師は僧侶一名にて営み申すべきものとす。

第拾壱条　審査委員参名を第壱条の組長より互選を以て選定し違約者の処分をなすものとす。

第拾弐条　第八条第拾条により執行致し難き場合は審査委員の許諾を得て執行するものとす。

第拾参条　前条々規約に違背するときは金拾円以下の違約金を徴収するものとす。

第拾四条　此規約は明治二十四年四月一日より二十七年三月まで満三か年間を一期限とす。

第拾五条　此規約は在来の一村規約に附帯の権限あるものとす。

年　月　日

氏　　名

（以下〇名連帯署名）

果して右のような条項が実行できたかどうかはわからないが、なかなか味のある規約であり、現在のような次第に華美になる冠婚葬祭も新生活運動として本申し合わせのようなことに近づける必要があろう。

西麻植の消防隊の話

西麻植には消防器機は大正の初め頃までは南組と麻植市の工藤源助氏（木製の手押）しか持っていなかったので、いざ火事の場合は麻植市郷の場合は工藤源助氏宅の倉庫まで借りに行って出動していた。

大正八年四月に大正組（大東の大と大正の正を取って名づけた）ができて、いざ火事の場合は川島町や鴨島町まで出動して消防器機の少なかった当時なので非常に重宝がられた。

後に工藤館蚕種合名会社が個人で購入して四台になったが一々借りに行かねばならず不便であったので麻植市郷も工藤館の社長である工藤鷹助氏の援助を仰ぎ昭和元年十一月に購入したがその価格は四千円位であったそうである。

警　防　団
（田渕・中筋）

そして工藤源助氏所有の機械は江川に、工藤館所有の機械は新田に寄附してもらったので、西麻植地区としては各郷に揃ったことになりいざという時にはすぐに間に合うようになった。

なお消防会館のうち麻植市会館は昭和十三年頃養蚕組合が弐百円を準備し家屋は工藤鷹助氏がそれに足して建設してくれたのであり、用地も同氏が提供してくれたのである。

現在も歳末警戒の時は夜警が各地区を廻っているが、昔は鐘の前は拍子木をカッチンカッチンと鳴らして制服のハッピ姿で廻り、また現在のように食物も豊かでなかったので、夜食として肉を買って来て肉御飯を作って腹ごしらえをしたり、ぜんざいを大釜一杯に作って、お茶碗に五杯も六杯も食べることが団員の楽しみでもあった。

西麻植のお医者さん

現在西麻植には木村医院があって我々の医療に当ってくれているが、大正の初期に広畑に上野賢蔵先生という医者が来られ、昭和十五年頃まで地域の人々の医療に当って居られたのである。氏は佐賀県出身の陸軍衛生曹長で、日露戦争に参戦した関係で外科の手術もせられ、現在のように正式

の学校で技術を修得せられたのではないが、軍隊の経験で免状をもらわれたそうである。

小柄ではあったがなかなかの好男子で、奥さんも看護婦であったそうだが、これまたすらっとした美人で、この田舎では見られないような人であり、二人とも愛嬌が良く人気があった。老齢のため息子さんのところへ引き揚げたが、何かの都合で再び帰ってこられて亡くなったが、晩年はお気の毒であったようである。

大正の初め頃はまだ自転車が普及していなかったが、先生は初めてドイツ製のラージ印の自転車を購入して往診に走り廻って居られた。当時、西麻植小学校の校長先生の月給八十五円と同じ八十五円という値段で買われたそうで評判であった。

上に二人の男の子がいて、二人ともお医者にならず他の職業につかれたようであり、一番下の女の子がこれまた美人で、終戦後子供を連れて帰って来ていたが、今はどうしているのであろうか。今だに気にかかるほどの八頭身の麗人であった。

芝居小屋日出座

西麻植広畑の現主麻植荘一郎さんの本宅の西側に酒蔵のような建物があり、昭和五十四年夏町道を拡張するために取りこわしてしまったが、この建物が明治から大正時代にかけて麻植郡にただ一か所しかなかった芝居小屋（一般に常設といわれた）の日出座（通称広土座）の名残の姿であった。麻植郡の中心商業都市でありまた官庁街でもあった川島町にもまた製糸工場の林立で栄え始めた鴨島の街にもなかった劇場が西麻植にはあったのである。すなわち西麻植は演劇文化の中心地であったのである。

通称広土座といわれたのも経営主の麻植清六さん宅の屋号が広土と呼ばれていたからであるが、その当主清六さんが劇場設立の申請書を明治四十三年十二月九日付で図面を添付して当時の県知事渡辺勝三郎宛提出して酒蔵（この酒蔵も明治二年の酒類製造業者に対する県の注意書が残っているから明治二年以前の建築と判断される。家を壊した時には棟札は残っていなかった）を改造して開館し、芝居から活動写真への変革期の時代の変化を総て経験した劇場で、歌舞伎、新派の芝居、浪花節、連鎖劇、活動写真等次々と来演、上映されたのであり、活動写真全盛時代といわれた時の名

日出座

子役高尾光子が実演のため来演し、篭に乗って顔見せに廻ったり、活動写真では猿飛佐助に扮した目玉の松ちゃん事、尾上松之助があの大きな目玉をむいて大見得を切ったり、手に印を結んで忍術を使えば一瞬にして大蛇や大入道に変身したり、建物が一瞬にして壊れる画面のからくりに子供たちは驚天動地の思いをし、また活動弁士独特の節廻しのうまさに酔いしれ、また剣戟場面では画面と乱調子の楽隊の響きに身も心も躍り狂って無我夢中になったものである。

芝居や活動写真が終わると、下駄の音をカラコロと響かせて、皆は三三五五川島へ、学へ、東山へ、鴨島へ、牛島へとお年寄はお互いに感激の余韻を胸に名場面をふり返り話し合いながら、また若いカップルは暗い所へ来れば肩を組んだり手を握り合ったりして帰って行ったのである。

芝居小屋の内部構造は、舞台は廻り舞台になっておったのであるが、この廻り舞台とは下に二か

所棒がついており一人ずつその棒を肩に掛けて押し、上では小道具の手のすいた者が片足でつっぱって動かして、背景等の早変りにより休み時間を短縮する装置であった。舞台の後ろが化粧部屋や寝室で、化粧部屋は出演の準備室であったが寝室としても利用した粗末なものであった。見物席は枡席が並び、天井は枡天井といって、一メートル角位で商店名が広告のために書かれたり花模様が色彩あざやかに彩られていた。

ここの芝居に使っていた篭は、当主清六さんの嫁に喜来の藤井家から来たリツさんが乗って来たものを利用して使っていたそうで、小屋を壊した時には舞台の上にゴミに埋れて残っていた。

正面の屋根の上にあった櫓太鼓は、朝一番と正午と開演時間を告げるための開演前との三回、バチさばきもにぎやかにふれ太鼓として高い音をひびかせていたが、この音色は附近の人々の耳底に今も残っていると思われる。

また田川市松さん（自称福島市松 ― 賤ケ岳の七本槍で有名な豊臣秀吉の小姓で後に四十九万石の広島城主となる）が、鈴をリリンリリンと鳴らして川島から鴨島方面へ当日の上演物をふれ歩いたこと、大きな劇団が来た時は十数台の人力車を連ね、幟を立ててそれぞれ役者が乗って顔見せに遠方までふれ歩いたこと、売店ではうどん、そば、ういろや菓子等を売っていたこと、お茶子はん

といってお婆さんや中年の女の人が貸しぶとんや貸し火鉢やお茶を運んでいたこと、時々活動写真が来た時はそのたびごとに電力会社から電柱にトランスをつけに来て上映期間が終わると取りはずしたこと川村清平、板野国助、白井某さん等が素人芝居の師範格で度々花芝居（入場料のかわりにお歓びをもらってする素人芝居）をしたこと、附近の人たちは櫓下といって無料で入場さしてもらったこと、近所で医者を開業していた上野賢蔵さんや裁縫の師匠で後に鴨島で劇場文化座を開業した甲斐フデオさん等が最大の後援者で、芝居が来るたびに花をあげていたこと等近所の人たちの今は語り草になっている。

郷土のシンボルであったこの劇場も、大正十三年に遂に閉館の止むなきになり、麻植家の物置として眠りつづけていたが、昭和五十四年夏さびしくも私たちの前から永遠に消え去っていったのである。

花と学校（大正末期の話）

ぽかぽかと温かい春の日ざしの中を、さえた鈴の音を響かせながら白装束の男たちと紺やピンク

の蹴出しの美しい女たちの巡礼が、咲き始めたレンゲやタンポポのとりどりの色彩と芳香の中を列をなして通り過ぎて行く。その姿は自動車が列をなす今と違って、なごやかな春の風物を更にのんびりとさせたものであるが、そんな頃、我々子供にも何か新しい期待に包まれた新学期が始まる。

新入生の中にはカバンや帽子を買ってもらえない子も多く、大部分が下駄ばき、着物で、新しい本を風呂敷に包んで鼻汁をたらしながら喜々として学校へ通ったものである。上級生も新しい弟ができたようなうれしい気分になったものである。

蝶の乱舞する校庭では、桃の花が我々の新学期を待ちきれないで咲いてしまって、こんどは僕の番だよと運動場の東北の隅に有った年老いた山桜の巨木が、見た目にもやわらかく感じるうすい緑茶色の芽を出しながら淡い桃色の小さな花を咲かせて、上品でさわやかな感じを与えてくれた。風が吹くとその花弁がチラホラと頭や肩にかかり、土に落ちたその花模様はさびた風景であった。

続いて、校庭の西北にあった花かいどうの蕾が釣鐘のように下を向いたと思うと、こんな美しい花があったかと思うようなピンクの麗姿を見せてくれて、毎日学校へ行ってこの花を見るのが楽しみでもあった。

梅雨の頃ともなると、周囲二メートルもあろうかと思われるようなアジサイの大株から、大きな

固まりの花が何十となく咲き乱れて、雨に打たれると更にその濃い色がさえて美しかった。せんだんの大木も青空一ぱいに小さな花をつけて、フットボールを楽しむ我々の足元にその小さな花弁を落として、この小さな花でも忘れないでとその存在を知らせてくれる。そしてそれから冬までは校庭の花は終わりを告げ、冬が来て裏庭の池のほとりの椿の花の咲くのを待つのみとなる。

桜んぼの小さな実は次第にふくらんで、未熟なまだ青いのや紫色の熟れたのを校庭に落として土を赤黒く染める。

せんだんも黄色い実を落とし、吉野川の川面や高越山の冷気を集めて、襲ってくる木枯しが吹きすさびだすと、高さ二十数メートルもあろうかと思われる子供の三抱えもあるポプラの大木や、いちょうの木は美しい黄色になるのもつかの間に葉を落としてこれからさらに増す寒さに耐えて冬を越す準備をするが、太い幹は冬のどんな寒い日でも巍然とデッカイ姿をして立っていた。ほかの木々も葉をちぢかめて春を待っている。そして新しい年度が始まる。

一月一日の四方拝には、赤、青、白の三色の大きなまんじゅうが一箱ずつ、袴をはいて参列した我々に配られる。校長先生の教育勅語や訓話を軽く聞き流して、式が終わると箱にはいったまんじゅうを水鼻をたらしながら脇にかかえ込んで持って帰ったものだ。ふたをあけると祝と焼判を押し

たあの大きなのをまず底のうす板をはがしてその濃い甘さを期待一杯に待ちかねて口にぱくついたなつかしい想い出が今でも目に浮かぶ。

そして裏庭の池のほとりの山椿の一重の濃い赤い花は、寒さにも負けず一輪二輪と枝の先につつましく咲いている。冷たい風に耐えて、友だちの他の花たちが暖かい風が吹いてきてからゆっくりと腰をあげて咲き出すのをひとり気長く待っている。

旧正月の威勢の良い餅つきの音が村中に響き渡ってから、我々は毎日弁当がわりにしょう油のつけ焼の餅を固くならないように肌で温めながら、昼食の時間を待ちきれないで休憩時間中に食べてしまって、昼の時間がくると腹の虫が納まらず全速力で家に帰って、餅を焼いてもらって満腹に満足してまた全速力で駆けて学校へ行った日課を繰り返しながらの毎日であった。

そして上り正月が近づくと各郷ごとに小供組で金を集めて藁小屋を建て、楽しく会食したり、花火をしたりして、旧正の十五日の朝がくるとその藁小屋を燃やすどんど焼（シャーラ小屋）をしたものである。子供たちや大人たちは、しめ縄を燃やしたり、その火で餅を焼いて食べたら身体が丈夫になるといって焼いて食べたりしたものである。

それからも、我々は毎日休み時間に寒さも物かは汗びっしょりになってフットボールに興じ、新

学期を待つばかりの毎日が続くのである。

平島の権やん（大正末頃の話）

朝早く、東の方から身体のがっちりした、頼もしげな青年権やんを先頭にした子供達の歩調を合せたエッサエッサや、流汗鍛錬同胞相愛の勇ましい掛声が静かな朝の空気をふるわせて次第に大きく響いて来る。その声は少年の心に身の引き締まるような緊張感か何か分らないが大きな期待と夢を与えてくれた。そして毎日僕達はその声のしてくるのを待って寝ぼけ眼をこすりながら、その輪の中にとび込むと、温かい安心感が身体を包んで皆の中へ溶け込み胸を張って大きな声で腹の中から皆に合せてエッサエッサと叫んでしまう。走るに従って一人増し二人増し追分まで来ると新田の子供達が七、八人も待っていて列の中に威勢よく跳び込む。夏のねむい朝も雪催いの冷たい朝もエッサエッサの掛声は我々少年の心をゆさぶりふるい立たせてくれた。

八幡神社の大きな鳥居をくぐって壇の原に到着すると、先ず山の朝の精気を胸一杯に吸って深呼吸だ。天突き運動と今もその名を覚えている天を突くような勇ましい運動等をして解散し、各々駆

足で我が家へと急いで我々子供達の日課が始まる。そしてそれは数年も続いたのである。

平島の権やん、親しみをこめて呼べるこの名は、子供の日の想い出として何時までも心の中に刻まれている。その名は平島権平。この権やんも今は亡い。墓は西東禅寺山の東斜面にある。

この間も墓参りのついでにお参りしたら権やんが墓の中から「この頃の子供は運動不足で太っちょや、足の弱い子が多いね」といってなげいていた。

柿と密柑と桑ぐり

明治大正時代の子供達は、宿題はなし、親が子供に勉強を強制するような家庭もないといっても過言でなく、ただ子供自身が勉強の好きな子だけが勉強をした位自由な時代であったので、子供の天国であった。ただ現在と違って主食はあっても副食が粗末で、菓子等はぜいたく品で常に菓子を買って食べるような事は滅多になかったので、学校から帰ってすぐ鞄を放り出して遊びに出かける子供達は腹がへって仕方がなかった。先ず腹おこしの一番は琉球芋のゆで干であった。どこの家でも芋風呂に収穫した芋を貯蔵してこれをふかして毎日おやつに食べたが、芋を小切りにしてそのま

まを藁で通して干し、白干というものにしたり、小切りにしたものを湯で煮てゆで芋にしたのを乾燥して生芋がなくなる四月頃からはそれがおやつの王様であった。またどこの農家にも夏みかん、りくじん（温洲みかん）、きんかん、枇杷、しぶ柿、甘柿や、あんず、すもも、さくらんぼ、いちじく、ゆすらんめ、いちご等を植えてあって、学校から帰ると木に登って取って食べるのが毎日の仕事であった。またそれでもの足りない時は、吉野川の川原にシャシャブの木があって赤い実と甘ずっぱい味に魅せられてグループで取りに行ったり、八幡さんの境内には椎の古木が何本もあって、それを拾いにいって炒って食べたり、山深く遠征して栗を拾いにいったり、わらびや、いたどりを取りに行ったり、籔の中の椋の木に登って実を取って食べたり、また青い実を取って帰って米糠に入れて熟れるのを待って食べたり、榎の実を拾ったり、桑園の中の真黒に熟れた桑の実を口一杯にほおばりながら登校や下校の途中に食べて口のふちを真赤にして授業を受けたり、用水のふちの俗称甘根草の根をほじってかんだり、その出穂をかんで甘味を味わったり、たまにはすいば（犬パッパ）の茎をむいて食べたり、自然の食品を食べることに過ごす毎日であった。またどこの農家でも砂糖黍を作っていたので秋が来ると毎日学校から帰ると畑へ折りに行って歯でむいては噛んだもので、今の子供の生活から見れば物がなかった時代とはいえ、のびのびと自由に生きた自然の生活であった。

第四節　スポーツ

草競馬の話

八幡神社の馬場では、大正の十年頃まで草競馬が年々盛大に行われていた。コースは大鳥居のあたりが出発点で、かけ上がり（現在残っている坂の上りつめた所で四メートル程今より高かった）が決勝点であった。コースがせまいので二頭ずつの競争で、出場馬は晴れの日なので赤や金色の染め抜きの布や皮に塗ったまぶしいばかりの飾りをつけて入場した。両側には桟敷もこしらえて賞品の寄附をした人たちを招待したし、また宮司の松本さんも本宅の土塀の上に桟敷をこしらえて個人で親戚、知巳の人々を招待した。大正十年頃の最後の年であったと思うが、その桟敷が大きな音をたてて縄が切れ、落ちかけたことがあった。幸いにもその下に立って見ていた人たちの頭の上まで落ちず、中ぶらりんとなって止まったので一人のけが人も出なかった。

当時は農耕用に馬や牛が必要であったし、軍用のためいざ戦争という場合に騎兵用や砲車を引く

ための砲兵用に何時でも召集できるように貸与馬といって政府が馬を貸し出して飼育させていた。馬の飼育が盛んであったから何十頭もの出場馬で賑ったものであり、当時の田舎ではこんなものが最大の楽しみであったのである。

競争馬として西麻植から参加した馬主は中筋の現当主多田良男、岡享、鎌田聚造、麻植市の工藤両家、田渕の当主佐野宗、平島善次、中央の当主仁井利雄、江川の当主明石勝一の諸氏等のお宅であったそうである。

打毬

打毬は大陸伝来の毬を打つ競技で、太平洋戦争までは騎乗用として馬を飼う人が多かったし、また陸軍が貸与馬制度といっていざ戦争という時に馬がそろうように民間に貸し付けたり、また農耕用にも牛と共に飼育する人が多かったので、いざ打毬があるとなればすぐ三十頭や四十頭は集まったものである。西麻植でも仁井孝雄、植村雅一、明石勝一さん等が世話役となって、年々西麻植の八幡神社前の馬場で太平洋戦争が始まる前頃まではよく開かれていた。

この競技は二、三十人の陣笠を着た騎手が紅白に分かれ、奉行（監督兼主将）に引率されて、作られた両方の門から入場、ほら貝等の合図に叉手といわれる竹の棒の先を曲げて糸でしばり、毬を引っかけて飛ばす道具で、中央に置かれた紅白の球を自分の方の門に早く入れ合いをする勇壮極まりない古の騎馬戦を思わせる競技で、奉行だけは相手の送毬を邪魔できるので騎馬の達者な者が選ばれていた。門に毬が入るごとに太鼓が鳴らされ、馬場の東側の台地の上から二、三百人もの観衆が太鼓の音が鳴るたびに歓声をあげて声援を送ったもので、娯楽の少なかった時代であるし、また軍国主義の時代の競技としてもてはやされ、この会が開かれる日を人々は首を長くして待ちかねたものである。戦前の風物詩として、ここの馬場で開催された草競馬と共に古老のなつかしい想い出となっている。

打毬に熱中した馬場

テニスクラブの話

昭和二、三年頃と思われるが、中西唯夫氏が中西家旧宅の前の農地をテニス場にして、同好者を募って禅麓クラブというクラブ名をつけて練習を始めたのが、西麻植のテニスの草分けである。無論軟式であった。

中西唯夫氏は徳島商業学校の野球部の選手であるとともに、庭球の選手でもあった。スポーツマンであった唯夫氏には、阿曽二、利夫の二人の弟があり、その二人も上手であったが兄には及ばなかったようである。クラブ員の中には明石勝一、仁井孝雄、中西好一、植村雅一等の諸氏がおり、また当時の麻植中学校の第一回生であった岡田一雄、立石元吉、大賀僖一の諸君や第二回生の植村芳雄、立石章一君等がいた。当時鴨島には暁クラブ、飯尾には田園クラブがあり、ともに県でも覇を争っていたが、禅麓クラブの面々は良いところまではいったが、遂に一回の優勝もなし得なかったようである。

西麻植の野球の草分け

西麻植の野球といえば球場が無いために西麻植小学校を利用させてもらってずいぶんと迷惑をかけたが、先駆者として中西唯夫氏と仁木島一氏をおいて他にはない。中西唯夫氏は徳島商業一塁手としてまたリリーフ投手として活躍、仁木島一氏は徳島鉄道局の名三塁手として昭和初期の実業団野球華やかなりし頃に大活躍をした。そしてこの二人の力によって始めて西麻植の地に軟式野球チームが編成され、昭和六年正式に西麻植ドラゴンズとして発足したのである。

この頃から阿北方面でも野球熱が盛んになり、石井、鴨島、川田、川島、飯尾敷地等にチームが誕生して、毎日曜に遠征したり、西麻植小学校や江川遊園地のグランドへ来てもらってしのぎをけずったのである。

当時のメンバーは、中西唯夫、仁木島一、植村芳雄、寺沢義高、平島善次、麻植幸雄、阿部晴幸、多田敬二郎、多田進、松本巌、吉村尚夫、中西政夫、鎌田厳、大賀武夫君等であった。中西唯夫（遊撃）、仁木島一（投手及三塁）両氏が監督としてまた中心選手として県下各地の大会に出場、数度優勝盃を獲得したこともあるが、この二人が年齢的にまた勤務の関係上出場できなくなると、左の

メンバーで戦った。

1. 村田進
2. 沢田敬
3. 植村
4. 多島
5. 寺本
6. 多植
7. 吉賀
8. 平田
9. 松西
麻部
大
鎌
中
阿

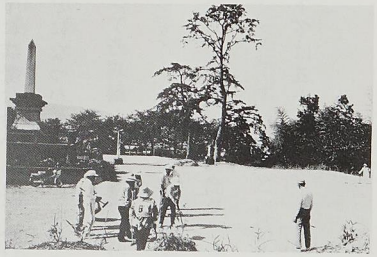
右の選手のうち多田進、吉村尚夫、松本巌の諸君は、太平洋戦争に召集されて、あたら若い命を南方戦線で散華されたのであり、麻植、鎌田、中西、阿部の諸君もすでに病魔におかされて今はこの世の人でないが、徳島で大会があれば自転車で駈けつけたり、ほんとになつかしい想い出が一杯である。

ゲートボール

昭和五十年頃より、国内でボツボツ始められたゲートボールも、県下では五十五年頃より県で指導者講習会等をして普及を始めた。

鴨島町では、天寿会連合会で五十六年度より役員も決定、西麻植地区では天寿会会長河野長久氏とゲートボール部長の平島正平氏が責任者となって正式に始めることになり、三月に壇ノ原にグランドを作り、翌五十七年度にはその上の忠霊塔の東側にも、一カ所作り足して、毎週火曜日と金曜日に二十人位は老後の楽しみの一つとしてかよいつめている。

川島や鴨島の方からも交歓試合によく訪れて、楽しい時間をすごしている。



ゲートボール

歩け歩けとジョギングコース

鴨島町としては、ジョギングコースが江川一周コースとして制定されている。西麻植公民館としても二六ハページのような西麻植小学校起終点コースと、西麻植駅起終点コースの二つのコースを決定してみた。一方は山のべの道であり、一方は川のべの道である。

山のべの道は、神社巡りともいえよう。笠松神社、山の神さん、十カ寺跡、八幡神社、忠霊塔、中内神社と、神社を参拝しながら、神域独特の霊気にふれ、心の安らぎを覚えることができる。また途中にあるお地蔵さんのなごやかなお顔に自然に自分の顔もほほえんでくるのである。板碑に昔をしのび、十一番藤井寺への道しるべに、お四国参りの人々のことをしのびつつ行くと、一汗かいて体がすがすがしくなるとともに、心も洗われ、特に春は菜の花やレンゲが咲きそろう道は、童心に帰ることができ、忠霊塔前の桜は特に心をなごませてくれる。

川のべのコースは、先ず稲荷神社を拝み、江川の清流に心を洗い、西へそのまま堤防を駆け上って広漠とした吉野川平野と、帯のような吉野川の流れを見て、「人生何する物ぞ、こせこせするな」の気慨を味わいながら、堤防上を一歩一歩ふみしめて行くのもよい。また江川の水源地の清らかな水を手ですくい飲みほして、一息入れて、八坂神社の方へ行き、それから堤防に出てもよい。このコースには道端にお不動さんや八坂神社もあり、ここを拝んで心と身を引きしめて行くのもよいであろう。

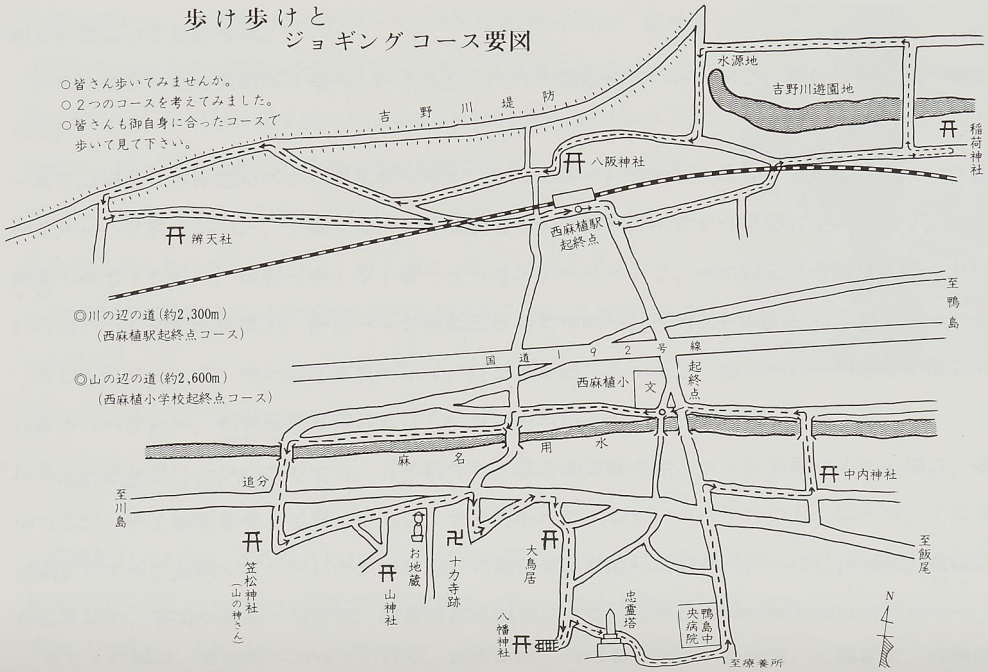
どちらのコースも起終点は決まっているが、どこを起終点にしてもよい。自分の家の近くを起終点とすればよいのである。

歩け歩けと ジョギングコース要図

○皆さん歩いてみませんか。
○2つのコースを考えてみました。
○皆さんも御自身に合ったコースで歩いて見て下さい。

◎川の辺の道（約2,300m）
（西麻植駅起終点コース）

◎山の辺の道（約2,600m）
（西麻植小学校起終点コース）



附

近郷のハイキングコース
西麻植歴史年表

近郷のハイキングコース

阿北の五か寺参り

四国八十八か所の六番安楽寺、七番十楽寺、八番熊谷寺、九番法輪寺、十番切幡寺とこの四国八十八か所の五か寺を歩き通せば一日行程としてはちょっと苦しい行程であるが、朝鴨島駅からバスを利用して上板町の鍛冶屋原駅まで行けば、駅から西方に六番安楽寺の高い屋根が目に入る。それからテクテクと歩けば割合楽に五時間位でゆっくりと帰って来られる。自転車を利用すればさらに楽なサイクリングコースである。

なお春は鍛冶屋原駅から北に松島千本桜の名所があるのでぜひ立ち寄ることをおすすめしたい。

六番安楽寺は上板町引野にある。鍛冶屋原の町から一キロメートル西方といえばわかりやすいだろう。本尊は薬師如来で藤井寺の本

五か寺参りサイクリング

尊と同じ仏さんである。この仏さんは心をいやし、身体の健康を守ってくれる仏さんである。寺の本堂は戦後火災にかかったが、鉄筋コンクリート造りの立派な堂宇が再建されている。しかしやはり木造の方が有難味があるようである。この寺は元ここから西北方の谷にあったが兵火にかかったので、ここに再建されたといい伝えられている。元の所は温泉が湧いていたので寺号を温泉山安楽寺と名づけられたといわれている。御所温泉と同じ山続きなので泉脈が通じているのであろう。

熊谷寺

七番十楽寺は六番から西の方一、一キロメートルの山裾にあり、地名は土成町法教田というところである。この寺は山の緑をバックに美しいたたずまいで、いつ行っても庭がきれいに清掃されていたが、これは売店のおばさんが朝夕掃き清めていたからだそうで、此の頃は売店も無くなり、そのおばさんもいなくなった。

この寺の本尊は阿弥陀如来さんである。あのナムアミダブツのアミダさんである。アミダとは無量、無辺、無限のことで、どこまでも、いつまでも我々を救済してくれる仏さんで、死後

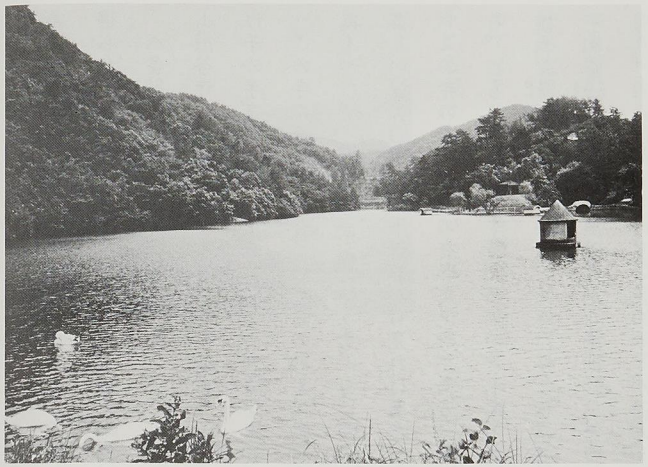
は極楽に我々を導いてくれると伝えられている。十楽寺の寺号は光明山十楽寺、光明とはこの世でも、あの世でも衆生に光明を与えてくれるという意であろうか。十楽とは十の光明に輝く楽しみが得られ、また極楽浄土に行けるようにと名づけられたといわれている。

八番熊谷寺は十楽寺から四キロメートル足らず西方の、土成町土成の谷合の丘の上にある。普明山熊谷寺と称せられ、本尊は千手観音さんであるが、この仏さんはどんな仏さんであろうか。これは千の手で一切の衆生を救い、御利益を与えてくれる仏さんである。

この寺の寺号の熊谷という意の熊とは動物の熊ではなく、古語で美しいとか、曲っているとか、奥まった所とか、隅っこという意にもとづいて名づけられたのであろう。ここの谷は曲っていて、美しい渓谷沿いで、平野部から見れば奥まった所であるので、地形から名づけられたのであろうか。

この寺の山門は県の有形文化財である。有名な多宝塔もあり、また寺を取り巻いて三つの池がある。ともに景色が良く特に西側の貯水池の所の高台に登ると、吉野川平野が一望のもとに眺められ、雄大な景観を呈している。又春は桜、秋は紅葉の名所でもある。

九番法輪寺は八番熊谷寺から南西約三キロメートルのやはり土成町田中というところの地名のとおり、田んぼの真中に高い甍の本堂が遠方からでも眺められる。



白　鳥　の　湖

ここの御本尊はお釈迦さんである。境内は狭く木も少ないので、何か他の寺に比較してもの足りない気がする。

十番の切幡寺は市場町切幡字観音というところにあり、春秋の中日さんに参詣者でにぎわうので有名であり、九番から四キロメートルの道のりである。

ここの御本尊さんは観音さんであるが、この仏さんはどんな願いごとでも打てば響くように願いをかなえてくれるといわれる仏さんである。

ここの参道は適当な登りになっているし、石段もあるから足を鍛えるにはもってこいのコースである。有名な大阪の住吉神社から移

して来た国の重要文化財である二重の塔もあり、塔前からの眺めもすばらしい。

この寺で五ケ所参りは終りであるが、ちょっと足を延して、この寺の裏山へ西方から新しくできた広い道を登れば、市場町が経営している白鳥の湖がある。白鳥が二十羽余り金清池と呼ばれる貯水池に放たれて遊泳している。この池は町が公園化してきれいに整備されていて美しいが、いつ行っても緑が水面に影を落として別天地の静けさを味わわせてくれる。

右の旅は自転車や自動車ならともかく、歩くと気のゆるみと疲れで家まで帰るのが問題だ。バスを利用して鴨島まで帰り、それから汽車を利用すればよい。歩いてもグループであれば話をしたり、休んだり、広々とした善入寺島の田畑を眺めたり、吉野川の水辺で遊んだりしながら帰れば、いつの間にか帰れるはずである。

御所温泉（奥宮川内県立自然公園）

御所温泉もサイクリングならば半日、ハイキングならちょうど一日の適当なコースであろう。

この温泉一帯も奥宮川内県立自然公園という、いかめしい名前になっているから、こう呼ぶ方が何か美しい所という感じがするから、おかしいものである。

なお地名の「御所」は、伝説として土御門上皇の御所跡の由来によるといわれているが、異説もあるので果してどれがほんとうであろうか。

さてここの宮川内谷は、今はたらいうどん屋が建ちならび、渓谷の岩の上に店を連ねて景観を台無しにしているが、昔の自然のままの岩肌と清らかな水の流れがなつかしい。

奥御所の御所神社あたりまで行くと、自然がそのまま残っているからぜひ行っていただきたい。

また平間橋から左へ入って、相坂ダムの清冽な深渓は、恐ろしいばかりに静まりかえって、鬼気せまる思いがする。

帰路は少し廻り道になるが、八番札所の熊谷寺に立寄ってお参りするのもよいであろう。

城王山と白鳥の湖

城王山は西麻植から市場町方面を眺めると、富士山のような美しい山が見えるのがそれで、自転車で行っても山は歩かねばならないから一日行程である。

この山はこちらから見ると美しいが、現地に近づくに従って、南北に長い山容が現れて、幻滅を感じるが、標高は五九八メートルもあって、山上には城王神社がある。祭神は天照大神と南北朝時

代の南朝の部将新田義貞の弟義宗、脇屋義治等が祀られている。この城を拠点として、新田一族が阿波の山岳武士と連絡を取り、平地の北朝方と戦ったと伝えられている。

山上には池があり、年中水が切れないが、何故水が枯れないかは理由不明であり不思議である。

またこの池は地質学上から見て墳火口ではないので人工的に掘られたものと思われる。

なお地名の犬の墓とは弘法大師が巡錫の折、連れていた犬が、ここの崖から滑り落ちたので、その犬の死をあわれみ、墓を立てて冥福を祈ったのが起源だといわれているが、これは全国的な伝説であるので、ここもそうではないであろうか。

地名学ではイヌとはイネのあて字で寝るとか横になることの意で、低い尾嶺等の、長い山の横に寝たありさまの形容である。墓とはハケで崖の意の方言であり、犬の墓とは結局低い山陵の崖のある所ということで、ここの地形に適合した地名である。

また帰りに登り口から東へ廻りこめば、白鳥の湖が近いので、静かなたたずまいの、山間の三つの池と白鳥を見て一息入れて帰るのが良いであろう。

川島城址

藩政時代初期に林道感が居城を構えた城山は、子供の頃から西麻植の人々の遊び場として皆な行っているが、西麻植からハイキングコースとして手近な良いコースではないであろうか。

川島城主林道感は藩主蜂須賀氏と同じ尾張の国の出身で、麻植郡十一か村を賜わり、五千五百石を領し、脇城主稲田氏に次ぐ重臣であった。

昭和五十七年四月落成した白亜の川島城の東側の松並木の中にその碑があり、横に小さな朝鮮女の墓と刻まれた、小さい墓がある。これは朝鮮の役に参戦した林道感が連れて帰った、美しい朝鮮娘の墓といわれている。異郷にただ一人肉身と離れて、毎日泣いて暮したであろう薄幸の乙女のことを想うと、胸がしめつけられるような気がする。

又善入寺島の島民移転の時に移って来た浮島八幡宮（現社名川島神社）もあり、真福寺の境内には貞治五年（北朝一三六五年）の銘のある板碑がある。また山頂には銅鐸出土の碑もある。

真福寺の北側にある善入寺島移転の碑は、政府による強制移転に対する島民の悲憤やるかたない気持が、血涙下る文句にして刻み込まれている。

春は桜・つつじ・さつき、夏は緑蔭、秋は紅葉、冬は烈風すさぶ岩の鼻にかえって魅力があり、また四季折々の吉野川とその平野の眺望は雄大で我々の近くにもこんな所があるのかと再認識させられる。

また昭和五十六年四月白亜の川島城や写し札所の八十八カ所が完成し、なおさらに我々を憩いの場として手招きしている。

上桜城から水神の滝へ

上桜城は川島の街並から、南方の山の中腹に、こぶのように出っ張った山がそれである。

今から四百二十余年前の室町末期、阿波では三好義隆の時代に、其の家臣で正義の士といわれた、ここの上桜城主篠原紫雲が、暴君であった主君から戦をいどまれ戦勢利あらず、元亀二年（一五七一年）に一族玉砕をして落城した古城だが、今でもその時の壕がそのまま残っている。

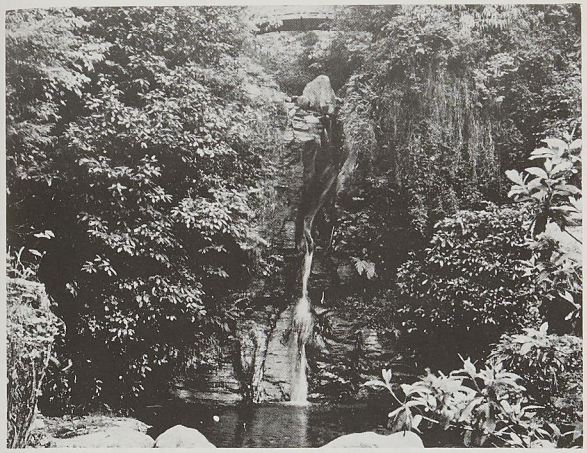
ここから東の下に見えるのが保養センター上桜であるが、近隣町村の人達が会合等の場として利用している。

東隣に大正池があり、これから東の山麓には、源光寺池、古志田池、塚池等の灌漑用の池がある。

先年完成した吉野川からの揚水施設と共に約五十ヘクタールの田を養っている。

中秋の月見で有名な山の神さんは、大正池の東側を南に登りつめた所にあり、ここに夫婦岩や永和二年（一三七六年）の板碑もあり、赤松やケヤキは樹令四百年位といわれるもので、一見に値する。それから一旦下って山麓を東に行き、湯吸谷川を溯って行くと、轟々たる響が聞えると共に滝が見えて来るが、ここが水神の滝で、上下二つの滝が落下している。二十メートルの高さから落ちる滝壷は夏なお涼しい憩いの場所で、キャンプや飯盒炊さんにはもってこいの場所であり、更に道なき道を登って行くと、やがて三つの滝があるが、一番上の滝は最大である。

ここのコースの所要時間は四時間位であろう。



水神の滝

石槌神社と樋山路

足を鍛えるコースとして、西麻植から真南の前山の尾根から下った盆地状の中にある、樋山路部落へのコースを推奨したい。

東禅寺山からまっ直に南に行って、山裾の山田の平倉地区を経由して行く近道と、敷地の唐谷の東側からの敷地 — 東山線の広い舗装道路を行くのと両方のコースがあるが、山田からの方が近道である。しかしそれだけ登りがきつい。急坂なので、ゆっくりゆっくり登らないと息切れがするが、ウグイスの声を聞きながら、青葉のむせかえるような匂いに包まれて登る気分は何ともいえない。

樋山路の部落へ入ると、山家ののどかなたたずまいが珍らしく眺めもよいので、登ってよかったと苦しさを忘れる。

石槌神社は部落の直ぐ上の方だが、登りがきついので一汗も二汗もかかねばならない。

敷島神社から藤井寺、天神社へ

西麻植駅からまっ直ぐに南へ突き当れば、国立療養所徳島病院だが、そこから左へ廻りこめば、

古木蒼然としたたずまいの中にある社が敷島神社である。

この神社にお参りして、足を東へ延ばせば、四国霊場第十一番札所の藤井寺までは約一キロメートルである。途中に河辺寺跡があり礎石がそのまま残っているし、立看板があって説明書きがこの寺の由来を教えてくれる。

藤井寺は桜の頃が良いが、五月初旬の藤の花は特に美しい。本尊薬師如来は国の重要文化財であるが、本堂の後の収納庫に納められているので、常には拝観できないが、写し本尊といって、本尊さんと同じ型の仏さんが祀られているので拝まれるとよい。

苔(こけ)むした山道の新四国参りも、落葉をふみながら一歩一歩の感触を味わったり、美しい、渓谷や清らかな水の流れを眺めながら参拝するのも気が落ちついて爽快である。

ここからさらに東へ足を運べば天神社に着くが、ここは境内が「少年の森」という少年達のキャンプ村になっている。

なおこの上のパイロット道路は山の中腹を川島から森山の方へ通じていて、この道を吉野川平野を眺めながら歩くと、すがすがしい気分になって心配事なんかいっぺんにふっとんでしまいますよ。

玉林寺から向麻山へ

森山の玉林寺から向麻山へ足を延ばすコースもなかなか良いコースであろう。

徒歩ならば四時間位、自転車ならば二時間位であろうか。

玉林寺は有名な話の治承元年京都の鹿ケ谷で高倉天皇の下に平家追討を計ったが、この謀議が平清盛に発覚して鬼界ケ島へ流されたが、後許されて源頼朝が天下を取るや、麻植保の保司となった平康頼が建立した寺であり、又近年廃寺となった西麻植の十力寺の檀家を引継いで、我々の先祖をお祀りしてくれている臨済宗妙心寺派の禅寺である。

ここはちょうど山麓の谷合にあり、数多くの大木が枝を競い、春と秋は一きわその風情を楽しませてくれる。

ここのもっこくの老木は推定樹令三百五十年といい県下一古く、またここの西方の壇にある大樟は推定樹令九百年といわれ、加茂と矢上の老樟に次いで県下で三番目である。

向麻山は鴻野山ともいわれ、山頂には竜眼神社、御嶽神社があり、ここからの四方の眺めはすばらしい。

西麻植歴史年表

年号	鴨島町事項（県事項）	西麻植事項
石器時代（無土器時代）	上浦、森藤壇、飯尾丸山、敷地赤坂に石器発見	ナイフ型類似の剥片石器（一五、〇〇〇年～二〇、〇〇〇年前）（壇の原の五本松の東北約十二、三メートルの土中）
縄文時代		東禅寺遺跡発見（四千年前）（土器、石器、住居跡発見）
弥生時代	旧森山村三谷、飯尾、敷地赤坂、長原で弥生式土器発見	東禅寺遺跡で土器、石器発見及び東禅寺遺跡の東南方登氏邸内で土器発見
古墳時代	上浦王子壇、旧森山村に銅鐸発見 上浦字岡、山路岡原、森藤城ケ丸、飯尾高原、敷地等に古墳	東禅寺山古墳

大化二年（六四六）	大化改新、粟、長の二国合せて一となる 麻植郡に属す	西麻植も麻植郡に属す
霊亀元年（七一五）	「里」を改めて郷となす 現鴨島町一帯呉島郷	西麻植も呉島郷に入る
宝亀年間（七七〇～七八〇）	こうべ寺跡（昭二十九年発掘）	
久安四年（一一四八）	藤井寺薬師如来坐像銘記あり	
文治二年（一一八六）	平康頼麻植保司となる	
文治三年（一一八七）	平康頼玉林寺創設	
正平十六年（一三六一）	南海道大地震、東由岐陥没	
元亀三年（一五七〇）	上桜城の戦（川島町上桜）	上桜城の戦により西麻植も、こぜり合があったと思われる
大正六年（一五七八）	長曽我部元親白地城占領	
大正七年（一五七九）	脇城外の戦（鴨島城主鴨島六之進、飯尾東城主麻植志摩守等戦死）	東禅寺の戦が此の年あったと思われる

年号	鴨島町事項（県事項）	西麻植事項
天正十年（一五八二）	中富川の戦（乗島城主乗島来心戦死）	
慶長五年（一六〇〇）	蜂須賀至鎮阿波に封ぜらる	
慶長九年（一六〇四）	検地施行	西麻植村御検地帳あり
	南海道大地震	
元和六年（一六一五）		この頃より藍作始まる
元和八年（一六二二）		東禅寺再興（棟付帳あり）
正保（一六四四）～慶安（一六四八）～一六五二		正保、慶安の頃西麻植八幡神社建立
明暦三年（一六五七）		西麻植村棟付帳あり
寛文七年（一六六七）		西麻植村棟付下改帳あり
寛文十一年（一六七一）		東禅寺を十力寺と改称
延宝二年		西麻植村棟付帳あり
天和二～三年（一六八二～八三）	阿波国旱害、又水害	

元禄二年（一六八九）		西麻植村川成引帳あり
元禄四年（一六九一）		右同
元禄七年（一六九四）		右同
元禄十四年（一七〇一）	阿波、淡路大雨、洪水	右同
元禄十六年（一七〇三）		右同
宝永元年（一七〇四）		右同
宝永三年（一七〇六）		右同
享保五年（一七二〇）		西麻植村棟付帳あり
宝暦六年（一七五六）	連年凶作、五社宮事件	五社宮事件、農民に檄文来る
明和六年（一七六九）		西麻植村棟付帳あり
天明五年（一七八五）		西麻植村川成帳あり
寛政四年（一七九一）	吉野川大洪水、被害甚大、秋祭中止	吉野川大洪水、被害甚大、秋祭中止
寛政七年（一七九五）		西麻植村川成引帳あり
文化四年（一八〇七）		右同

年号	鴨島町事項（県事項）	西麻植事項
文化十一年（一八一四）		西麻植村川成引帳あり
文政十二年（一八二九）		右　同
天保十四年（一八四三）	吉野川大洪水（七夕水という）	
慶応三年（一八六七）	エエジャナイカの踊大流行	エエジャナイカの踊西麻植にも波及したものと思われる
明治二年（一八六九）		河野與平居宅に涵養学校創設
明治五年（一八七二）	麻植郡第五大区となり現鴨島町は一、二区に編入	西麻植村は第二区に編入
明治七年（一八七四）		西麻植小学校創立
明治二十二年（一八八九）		十月飯尾村、敷地村、西麻植村合併し西尾村となる
明治三十二年（一八九九）	吉野川大洪水 二月十六日鴨島―徳島間鉄道開通	十月十五日西麻植駅開駅

年号	鴨島町事項（県事項）	西麻植事項
明治四十一年（一九〇八）		五月一日麻名用水通水開始
明治四十四年（一九一一）	吉野川洪水	近藤廉平氏歿（年七十四才）
大正十年（一九二一）		
大正十四年（一九二五）	麻植中学校開校（川島町）	
大正十五年（一九二六）	鴨島菊人形始まる	工藤鷹助氏江川遊園地起工
昭和三年（一九二八）	吉野川大洪水	江川遊園地経営開始
昭和六年（一九三一）	吉野川大洪水	西麻植の若者も上海に出征
昭和七年（一九三二）	徳島歩兵第四十三聯隊上海出動	
昭和八年（一九三三）	鴨島公園にプール完成	
昭和九年（一九三四）	室戸台風	
昭和十年（一九三五）	三月二十日高徳線開通 十一月二十八日土讃線開通	西麻植の若者も上海に出征
昭和十二年（一九三七）	日支事変起こる 徳島歩兵第四十三聯隊上海出動	切幡参りの客を乗せた粟島渡しの舟沈没、死者多数

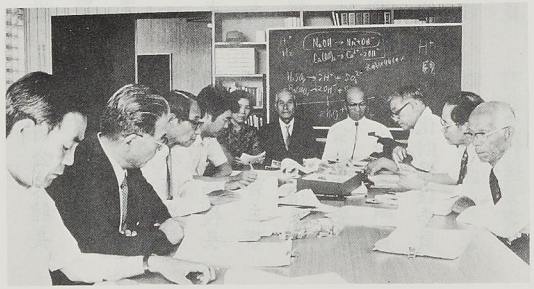
年号	鴨島町事項（県事項）	西麻植事項
昭和二十年（一九四五）	第二次世界大戦終戦	郷土の応召兵続々帰郷
昭和二十一年（一九四六）	日本国憲法発布	
昭和二十二年（一九四七）	三月二十三日鴨島町大火災（一四五戸焼失）	
昭和二十五年（一九五〇）	ジェーン、キジヤ台風襲来	ジェーン、キジヤ台風襲来
昭和二十九年（一九五四）	新鴨島町誕生（三月三十一日）	西尾村も新鴨島町に入る
昭和三十六年（一九六一）	吉野川大洪水、善入寺島荒廃甚し	江川水温異状現象、徳島県天然記念物に指定
昭和四十四年（一九六九）		明治乳業鴨島工場開設
昭和四十六年（一九七一）		江川遊園地、吉野川遊園地と改名
昭和五十六年（一九八一）		十力寺廃寺となる
		西麻植八幡神社陶製狛犬、鴨島町の文化財に指定
昭和五十七年（一九八二）		西麻植八幡神社の木製両部鳥居、花崗岩製太鼓橋共に鴨島町の文化財に指定

あとがき

委員達の力の結集によって「風土記にしおえ」が税稿したが、「ああようやく終ったなあ」と皆重い肩の荷が下りてホッとして顔を見合せているところであります。

大体西麻植というところは山が少なく大部分が低地なので堤防ができるまでは吉野川の遊水地帯であって人が住み始めるのが遅かったので歴史が浅く他の地区に比較して遺跡、神社、仏閣その他の文化財も少なく、いわゆる書く材料が乏しくその資料集めに苦心したことは確かであります。それだけに内容に深みがないということは編集者の皆が認めるところであります。

とにかく素人の私たちが初めて作ったものですからいろいろと欠点はあると思いますが、これが文化意識の向上の一助にもなれば幸甚に存じます。



編集中の委員

風土記にしおえ編集委員

編集委員

委員長	植村　芳雄	西麻植公民館長
委　員	青木　幾男	町文化財保護委員
	植村　光男	元中学校長
	大賀　僖一	町社会教育委員
	河野　　真	西麻植小学校校長
	工藤　俊夫	町社会教育主事
	河野徳三郎	町社会教育指導員
	佐野　辰夫	町社会教育委員
	多田　良男	元町議会議員
	多田　高信	町文化財保護委員
	平島　桃作	郷土史研究家
	藤田　　晃	町公民館運営委員
	松本　歌子	八幡神社宮司
	宮本徳三郎	西麻植会館指導員

〝参考文献〟

執筆上の参考に使用させていただいた文献・史料はつぎのとおりである。明記して謝意を表したい。

徳島県郷土事典・徳島県百科事典・徳島県神社誌
麻植郡誌・麻植郡郷土誌(久保忠男著)・鴨島町誌
大日本神名辞書・日本石仏事典・角川日本史辞典
神々の系図・続神々の系図・西麻植小学校百年史
川島町誌・阿波の百姓一揆

風土記にしおえ

発行日　昭和57年8月1日

発行　鴨島町西麻植公民館
館長　植村芳雄

印刷　坂東印刷所
鴨島銀座・TEL(08832)4-2234

頒布実費　1,000円